ニッポン 人・脈・記
jinmyaku@asahi.com

「在日」という未来②

迷い戦う「三四郎」だった

さまざまな本との出会いで私はどのように変わったか。悩みながらどのように生きていくか。政治学者なのに姜尚中(58)はなぜ、人生をテーマに本を次々と書くのか。

姜は、夏目漱石の『三四郎』の文庫本を時折カバンに忍ばせる。「まるで自分のようで。うり二つなんです」

時は明治、熊本の田舎の青年「三四郎」は東京に出て帝大に。ちんちん電車が走っているのに驚く。人の多さ、東京の広さに驚く。おずおずと新世界に入っていく。

時は昭和、「熊本の地金屋の息子」、永野鉄男と名乗っていた姜は、養豚やどぶろく造りの朝鮮人集落で育つ。吃音だった野球少年時代、「在日」を隠した青春の憂鬱……。上京して69年、早稲田大に入る。東京はぎらぎらして、電流が至るところに走ってびりびりするような感覚にとらわれた。

下宿の住人に出自がばれやしないかと冷や冷やした。「在日」の影におびえるように、新宿の「紅テント」の前衛劇に、シャンソン喫茶に、そして図書館にこもる孤独な読書に。

71年、大学3年の夏休み。韓国の親類を頼ってソウルを訪れた。漢江の近くに黒々としたスラム。物ごいの子もいっぱい。

東大キャンパスの「三四郎池」のそばに立つ姜尚中さん

金洲詰さん

でもどこか故郷の集落に似て、いとおしい。人に違いはないんだ。緊張が解け、肩の力が抜けていった。永野鉄男を捨てよう。吹っ切れた。

大学に戻り、在日学生サークル、韓国文化研究会の門をたたいた。「姜尚中といいます」。迎えたのは1年先輩の金洲詰(60)。金融業を経て、いま山口県で行政書士。そのころ長髪だった姜の印象。「研究会でいろんな人の話をじっと聞いていた。ひながかえる前の状態でしたね」。姜自身は「ぼくなんか金魚のふんでしたけど」。

姜は「にわかナショナリスト」と自覚するまでに変わる。金大中拉致事件や学生弾圧に抗議し、民主化を求めて韓国大使館にデモ。韓国民団の中央大会にのりこみ、独裁政権支持派との乱闘騒ぎに加わった。

「三四郎」は惑いつつ青春を生きて、あこがれの女性美禰子から「ストレイシープ(迷える羊)」と謎の言葉をかけられる。この日本でどのように生きていけばいいか、姜もまた、ストレイシープだった。

大学の非常勤講師となって85年、姜は埼玉在住で初めて外国人登録証の指紋押捺を拒む。告発、逮捕をほのめかす行政側。姜を支援した市民グループ代表、いま桶川市議の北村文子(58)は「私も泣きながら、かたくなな役人に怒った」。

北村文子さん

だが姜は生活とのせめぎあいの中、指紋を押す。牧師の土門一雄は「姜さん、あなたが犠牲となる必要はない。悩まなければならぬ状態をつくっている日本人にこそ問題があるんですよ」と励ましてくれた。

姜はいま、「朝まで生テレビ!」などテレビ討論番組の顔である。そのきっかけをつくったのも北村である。

北村は90年、ミス・コンテストの是非の討論を企画したテレビ朝日の「プレステージ」に出演を打診され、姜を誘った。「丁寧な語り口と鋭い指摘。テレビ受けすると直感した」。いま社民党党首の福島瑞穂(52)も弁護士として並んだ。

賛否騒がしいスタジオで、姜は、司会者があえて発言を促すほど存在感を示した。北村は「やった。大成功」。

姜さん、メディアで発言するのはなぜ? 「私たちは日本の中のおじゃま虫や、韓国にとっていつでも切り捨てられる盲腸ではない」。東北アジアの未来を考えるとき、国にとらわれない「在日」こそ前衛的存在なんだ、朝鮮半島の統一だってナショナリズムを超えなければできない、在日は小さいけど大きな役割を果たせるよ。姜はこうした話題になると「つい熱く語ってしまう」と述懐する。

いま東大大学院教授の姜の研究室から、三四郎が美禰子と出会った三四郎池が見下ろせる。「現代の三四郎」は迷い、戦い、悩んできた。水面には、時代の針路を論じる思想家が映っている。

(崔琛寿)